

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

トルコの近代公教育の成立期における教育家ムスタファ・ネジャーティの功績に関する考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2017-04-01 キーワード (Ja): トルコの教育改革, ムスタファ・ネジャーティ, トルコの教師教育改革, トルコ語文字改革 キーワード (En): 作成者: チャクル, ムラット メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://doi.org/10.18956/00007728

トルコの近代公教育の成立期における教育家ムスタファ・ ネジャーティの功績に関する考察

Cakir Murat

要 旨

本稿は、トルコ近代公教育の確立に尽力したムスタファ・ネジャーティの功績の一端について明らかにすることを目的としている。トルコの近代公教育制度の成立において彼は世俗主義という理念とアタテュルクが示した民主主義、人民主義等という6つの理念を基礎にトルコ公教育が発展するよう多大な努力をした。例えば、トルコの近代公教育の発展のために国家教育省、教育委員会、学校組織の間で調和的な連携・協働体制を整えた。本人が教育実践者であった経験から特に教職の重要性をいち早く理解し、教師教育を再編すると共に教職に対する社会的地位の向上に取り組んだ。オスマントルコ語を廃止し、新しくローマ字を基本とする文字改革を行い、一般庶民の誰もが教育を受けることが可能となった。また、西欧から専門家を招いて職業教育と美術教育にも力を入れた。彼はデューイの教育思想に影響を受け、デューイが報告した提案を実施し、諸改革を成功に導いた。

キーワード：トルコの教育改革、ムスタファ・ネジャーティ、トルコの教師教育改革、トルコ語文字改革

1. はじめに

トルコは、今日、重要な分岐点に立っている。ここでいう重要な分岐点とは、欧米諸国のような近代化を成し遂げるか、それとも近代と逆の方向に進んでいくのかということである。トルコでは、現在共和国宣言以前のような宗教中心の教育が進められ、また宗教学校（宗教の業務に従事する職人を養成する学校）に教育制度が改められており、近代教育に求められる民主的で、科学的で、社会を生き抜く力を育てる教育から離れていっている。また、PISA 学力のテストでは、60か国中、40位となっており、最下位グループに入っている。このことは、今日進む宗教色の強い教育制度の失敗を表しており、近代化路線に逆行していることが一つの原因であるといえよう。本稿は、トルコのこれからの行方を見定めるべく、そもそも近代社会になるために共和国宣言前後の当初はどういった教育が行われようとしたのか、そこから考える時、今後はどうなっていくのかを、トルコの近代教育成立の原点に立ち戻って考えたい。

トルコにおいて近代的公教育制度の基本構造が出来上がったのは、共和国を宣言した1920年代前後のことであるが、それ以前に西欧化に失敗し続けてきている経験がある。当時、トルコの近代的教育制度を創造するために数多くの著名人が努力を惜しまず働いていたが、その中で、トルコ教育への貢献が最も評価されてきたのがムスタファ・ネジャーティ (Mustafa Necati Uğural, 1894年～1929年) とハサン・アリ・ユジェル (Hasan Ali Yucel, 1897年～1961年) である。トルコ人の父といわれるのはトルコを自由へと導いたトルコ再建のリーダーであるムスタファ・ケマル・アタテュルク (Mustafa Kemal Atatürk, 1881年～1938年) であるが、アタテュルクとともに教育の分野で大きな功績を残したのが、ムスタファ・ネジャーティである。彼はトルコの教師たちの父親的な存在であり、初めてトルコの教師たちの社会的地位を改善し、教師の資質・能力の向上と教職の発展を最も重要な課題とした。そして教育大臣として自ら直接教師教育の発展に取り組んだ。現在でもトルコの教師たちの間では彼の功績は忘れられていない。

トルコが共和国になった1923年当初は、公教育の成立および教育開発に関して、初めての取り組みが多く、この時期は欧米諸国のような文明国をめざして大きな教育改革が推進された時期である。ムスタファ・ネジャーティは、アタテュルクの親友であり、トルコの独立戦争の時とともに戦い、独立戦争後トルコの近代化においてアタテュルクが最も信頼し、期待した人物であった。アタテュルクは、その後のトルコの発展のため、民主主義、人民主義、愛国主義、世俗主義、革命主義、国家主義という6つの基本理念を明確にし、それに沿った教育改革を国家主導で進めていった。それによって当時教育機会が与えられていない一般民衆の80%が、教育の恩恵を受けることが可能となった。教育大臣として1925年～1929年の間トルコの近代的公教育の確立に果たしたムスタファ・ネジャーティの役割は極めて大きい。

以上を踏まえて本稿は、トルコ近代公教育の確立に大きな役割を果たしたムスタファ・ネジャーティの功績の一端を述べつつ、トルコの近代公教育の原点を再確認しようとするものである。

2. ムスタファ・ネジャーティのプロフィール

ムスタファ・ネジャーティは1904年にエーゲ海沿いにあるイズミール県で生まれた。同県にある小、中学校を卒業し、イズミール高等学校を卒業した後、高等教育を受けるためにイスタンブール法律学校に入学した。1913年にそこを卒業した後、1914年にイズミールに戻り、女性教員を養成する師範学校で教師をしながら、実家があるイズミール県で弁護士もやっていた¹⁾。さらに教育大臣になる友人フセイン・ワースフ (Huseyin Vasif) と一緒に、1915年にオゼル・シャルク・イダディシ私立高等学校 (Ozel Sark Mektebi İdadisi) を創設し、1918年まで校長

を務めると共に文学の授業も担当していた。ムスタファ・ネジャーティは、独立戦争終了後、貧困や失業などに悩む国民の問題を解決するために自衛共助協会（İhtiyat Zabitanı Teavun Cemiyeti：イヒティヤチ・ザビタニ・テアヴン・ジェミイエチ）などを設置させた²⁾。また、若者のためにアルタイ・スポーツクラブを設置して、彼らの居場所づくりに励んだ。さらにイズミール県とアイデュン県間の鉄道の法律相談役にもなっていた。

1919年5月15日にイズミール県がギリシャによって支配されると、ムスタファ・ネジャーティは、バルケシル県に逃げ独立反抗軍に加わった。そこで『イズミールへ向かって』という新聞を出版し、国の独立に向けての記事を書いたり、実際戦場に立ち、独立軍隊長としても戦ったりして³⁾、トルコの独立のための努力や貢献を惜しまなかった。彼は1920年12月20日にマニサ県の大員として第一回トルコ大国民議会に参加した。1923年から1927年の選挙でイズミール県国会議員に当選し、1923年から1924年にかけて開発復興庁大臣、1924年に法務大臣を務めた。こうした経歴の後、1925年12月20日から1929年にかけて教育大臣の重責を担うことになったのである⁴⁾。当時トルコ教育の再建の上で彼に大きな期待がかけられていたことがわかる。しかしムスタファ・ネジャーティは1929年12月31日に、35歳の若さでこの世を去った。

3. ムスタファ・ネジャーティの教育思想と近代的公教育改革への功績

アタテュルクは、1923年に「トルコ国家教育の目的は知識を人にとって不必要な飾り、または抑圧手段あるいは文明の都合のいいように利用するものではなく、人を成功へと結びけることを可能にする手段とすることである」⁵⁾ということを公教育の基本理念としたが、ムスタファ・ネジャーティはこれに賛同し、教育におけるプラグマチックな知識の重要性をとくに主張した。ムスタファ・ネジャーティは、アタテュルクが示していた生活と教育は切り離すことができないものであるという理念の意義を真に理解し、「教育は生活および社会のニーズに応えるものであるとともに国の経済や生産などを促す方向で展開されるべきだ」⁶⁾と述べ、教育における生活との連携の重要性を唱えた。また、彼は「学校は子どもに自然、モノ、現実を体験させ、元気に自由な空間の中で、学び、考え、実体験し、判断へと導くような組織であるべきであり、我々は子どもたちがお互い助け合いながら、補完しあいながら、学んでいる研究所であってほしい」⁷⁾と述べ、生活における体験学習から得る学びやそれによる社会に生きていくうえで必要なスキルを学校で身につけることを考えていた。またムスタファ・ネジャーティは共和的国家の理念に基づいて合理的で科学的な教育を行うことによって次世代を育成することを目指していた。

ムスタファ・ネジャーティは様々な役職を担っていたが、特に教育大臣の任務中に強烈な個性と真のイノベーターとしての性格を見せ、国家教育制度とその組織の発展に多大なる努力を

注いでいた。彼は教育者であり教育経営者でもあった点が注目されている⁸⁾。またギュヴェン (Güven) は、「ムスタファ・ネジャーティは、トルコの教育制度にダイナミズムをもたらし、モチベーションも与えて、アタテュルクの示した改革が根付くように努めた」と述べており⁹⁾、文字改革、海外からの教育の専門家の招待、明確な哲学に基づく教育制度の構築等様々なイノベーションを行った。これらは彼が教育大臣に就任していた時期に行ったものである。

トルコの教育近代化を確立するうえで、ジョン・デューイの影響は重要であった¹⁰⁾。デューイは1924年にトルコの教育改革について報告書を書き、提言を行ったが¹¹⁾、ムスタファ・ネジャーティは、彼が教育大臣に就任する以前にはだれも取り上げていなかったデューイの提言を具体化し、成功に導いた。即ち彼は、「生活に役立つ情報を提供すること」、「実践で使われるように情報を体系化するという実用主義的な考え方」¹²⁾の2つの理念を取り入れた取り組みを行っており、そこにデューイの教育思想の影響を受けていることがわかる。

3. 1. 科学的な近代公教育の開始

3. 1. 1. 教育行政組織¹³⁾の設置及び統合¹⁴⁾

ムスタファ・ネジャーティはトルコ共和国の第七代目(1925年～1929年)の教育大臣である。当時、様々な省の大臣が絶えず入れ替わっていた中で、特に教育大臣の入れ替わりは激しかった。しかし、1925年にムスタファ・ネジャーティが教育大臣となったことによって、教育省の組織は継続性と安定性を得て¹⁵⁾、よりよく機能するようになったと考えられる。

エルグン (Ergun) は、「ムスタファ・ネジャーティは、教育大臣は国民の公教育や文化の需要に対応する教育上の政策についてすべての権限や責任を持たなければならないと主張した」と述べている¹⁶⁾が、当時の教育大臣の権限や責任は国家以外の行政機関に分散しており、ばらばらであった。こうして、知事や教育長といった一個人に委ねられていた教育行政の権限を国家教育及び組織に関する法律 (Maarif Teskilatına Dair Kanun : マアリフィ・テシキラティナ・ダイリ・カヌン)¹⁷⁾によって統一し、教育行政の法的基盤を整備した。このことによって教育行政の機能及び効率が改善されたし、教育行政のその後の在り方についても方向性が明確となった。例えば、それまで初等教育の拡充の権限は知事が担っていた。そのため教育省はいくつかの県の初等中等教育行政を統合させた教育区域を設けて、その教育区域におけるすべての教育行政を教育省の下で行う教育委員会に任せることが決定された¹⁸⁾。これは教育行政の中央主権化への道を開くことになり、教育に関する施策や実践における中央の役割の増大をもたらすことになった。これはトルコの教育史上における画期的な取り組みであった。

ムスタファ・ネジャーティが設けた地方教育組織としての教育委員会は、デューイの報告書に提案されたものだと見られている。デューイの報告書においては、「公教育システムがまだないトルコは、国民の全てに提供する一般的な義務教育の発展を目指し、まだ教育を受けてい

ない多くの国民のために、教師を養成すべきであり、トルコの教育省がその経営を行うべきだ¹⁹⁾ という提言が記載されている。このことから、ムスタファ・ネジャーティによる教育政策には、中央による教育行政を基本にしなが、地方の特色を生かす地方分権を重視し、進めようとする考え方があったといえよう。

3. 1. 2. 教育課程の基準の作成と公示

ムスタファ・ネジャーティにとって教育の目標とは、「次世代の心身の発達の育成だけではなく、国の利益の面からも、自分たちが新しい生活と民主主義の必要とする能力を準備すること」²⁰⁾ である。彼は当時しばしば起きていた学生デモや社会において秩序、規範が悪くなっていることを憂慮して学校において強い規範認識と高い道徳性にあふれる風土が支配することを願っていた。彼はこのような観点から、新しいトルコに継続性のある公教育政策を創造することに努めていた。

ムスタファ・ネジャーティは教育大臣になってすぐに教育課程の基準を設け、教育に計画性を持たせるように努めた。そのために国家教育及び組織に関する法律を制定した。そして、1926年3月20日に実施されたこの法律に基づいて、教育政策を策定するために教育省内に2つの科学委員会を設置した²¹⁾。その1つは言語に関する問題を検討する言語委員会、もう1つは、教授学習について議論される教育委員会である。

さらに、彼の取り組みの中で画期的なものは、世俗主義的教育の実施のための様々な努力と働きかけである。ここでいう世俗主義とは、政治と宗教の分離のことである。トルコの公教育において、世俗主義になる前はイスラム教思想を教育内容としており、男女別学を基本とした教育が行われていた。ムスタファ・ネジャーティの西洋的な教育方針によって世俗主義が導入され、当時コーランの内容を暗記することが教育だと思われていた宗教的教育内容が改められ、プラグマティズムを基本とする西洋の科学的な教育内容が導入されることになった。教育基本法と教育課程の基準の制定は世俗主義を根付かせようとするムスタファ・ネジャーティの取り組みであった。このようなムスタファ・ネジャーティによる「初等・中等教育における男女共学の実施」や「初等・中等教育の無償化」²²⁾ などは、教育の機会均等および民主的な国家における教育の機会均等政策に共通する取り組みであり、国内外で大きな反響を起こした。

3. 1. 3. 職業教育・美術教育の導入とその教育課程

ムスタファ・ネジャーティは、改革への取り組みをさらに推し進め、職業・美術教育を導入するために外国から専門家を招き²³⁾、彼らの提供した報告書の内容を実施しようとした。イナン (İnan) は1927年5月12日にトルコ大国民議会において「民主的な国では公教育とともに職業教育を受けることの必要性をすべての人に自覚させている」²⁴⁾ という。この言葉は、ムスタ

ファ・ネジャーティが、後ほど実現しようとするこの宣言でもあった。このことから彼が、西欧諸国の近代公教育を念頭に置いた改革を行おうとすることがわかる。彼がこのことを考えるようになったのは、1927年に行ったヨーロッパ旅行での視察で得たものであった²⁵⁾。

1927年2月3日にヨーロッパでの教育制度に関する調査が終了した後、帰国したムスタファ・ネジャーティは、イスタンブールで開いた記者会見で、特に職業教育、実習、実験と観察に基づく教育、体育などのテーマに触れて、近代的公教育の意義と美術教育の必要性について演説を行った。ムスタファ・ネジャーティが、これらの中で特に取り組んでいたのは、美術教育であるが、彼は、美術教育のカリキュラムと体育のカリキュラムの見直しのための委員会を設置すること、体育教師問題を解決するためにスイスから教授を招待すること、美術の社会的意義の重要性を国民の間で広げるためドイツ人の教授たちと共同で行っている手芸に関するプログラムや芸術と音楽のプログラムを作成すること²⁶⁾などの取り組みを通して、トルコの近代的公教育が求める美術の教師たちを養成することを意図していた。

トルコでは当時、一般大衆の生活はイスラム教のルールに基づいて営まれるものであった。イスラム教では、美術というとアラビア語のカリグラフィーや細密画（ミニアチュール）などといったものが一般的であり、飾りとして扱われていた。また、絵画や人間の仏像などを作るのがタブーとされていた。しかし、ムスタファ・ネジャーティは、国民美術教育の重要性を認識し、それを向上させるための組織の強化を図った。彼は、「美術が単なる飾りではなく、国民の生活に欠かすことができない文化的教養であり、今後高度な専門性を持つ美術家の養成の必要性が生まれる」²⁷⁾と考へ、絵画、仏像の普及のために美術アカデミアを設置した。また、彼は、国民の間に美術感覚を広めることが国家教育省の仕事であると考えていた。そして学校教育における美術教育の意義を広く普及させるために、西洋の美術理念を学校教育に導入し、美術家たちに対して展示会や作品購入を促進させるために、省内で美術教育課と対策検討のための美術教育委員会を設けた。

3. 2. 教職の社会的地位の確立・向上と教師教育の再編

トルコの近代教育の発展において、何よりもムスタファ・ネジャーティが重要な役割を果たしてきたのは、教師の労働条件の改善、教職の地位向上、そして教師の諸問題の解決である。ムスタファ・ネジャーティの教育大臣の時期における様々な成功の実績のうち、最も重要なことは、教職にもたらされた尊敬、価値、誠実性といった3つの面から社会的地位の向上である。彼は若手教師のモチベーションを高めることと教職の質を高めるためのどのような努力も惜しまなかった。ムスタファ・ネジャーティはある演説でそれについて次のように述べている。

十分な教育を受けた先生たちが養成されるまで、いま現場で働く先生たちに頼るしかない。いま現場で働く先生たちの専門性を高めるために11か所で新しい教員養成プログラム

を開催した。OJT プログラムを通して教師の専門性を高めることがある程度できた。教員の数の増大もある程度できた。先生たちの労働時間の整備と改善も行われた。²⁸⁾

上記の彼の言葉から、教師の養成及び教育についての基本的な考え方がわかる。だが、トルコでは大学での教員養成が始まるのは1980年代になってからであった。

教師問題の改善を狙うムスタファ・ネジャーティは、教師を教育政策決定機関への参加や教育政策の実施をリードする立場に置くという重要な取り組みも行っていた。教育において実体験の重要性を理解していたムスタファ・ネジャーティは、ある演説で、「公教育の問題の解決において、教員に相談しないで決定することはよくない。初任の教員からベテランの教員まですべての同僚たちの意見を聞くことは我々の基本的な理念であり、そしてこれらの理念通りに物事を行う」と述べており²⁹⁾、教師の教育政策決定過程への参加を教師の基本権利だと考えていた。

ムスタファ・ネジャーティは教師の資質力量の向上のために必要な取り組みを次々と行っていく中で、教師たちが教師の力量向上のための専門書を手に入れて読んでいないということを知り、そのために雑誌や本を出版させた。教育実践において教師の専門職性の向上の重要性をよく理解していたムスタファ・ネジャーティは、「教えること以上に学ばない教師は、より早く燃え尽き、より早くふけて、物事を面倒だと思ふ癖がつく。しかし、研修に励み、教育に興味関心を持つことに積極的に取り組んでいる教師ほどいつも若々しくて元気である」と述べており³⁰⁾、教師の力量向上のために学び続けることの重要性をいつも強調していた。そのために、教材が常に利用できるように準備されている「学校博物館 (Okul Muzesi : オクル・ミュゼシ)³¹⁾」を設置した。またその中に、移動型の教師専用図書室が設けられ、教師たちが必要とする図書を郵便で送るための方策を進めた。また、教師たちと自ら直接会って、健康士の問題や労働条件の問題などについて、聞き取り調査を行い、それらの改善に取り組んだ。最初に地方や田舎の住民が教育を受けられるためと、教員養成をも行えるために、2つの村で「村の教育館 (Koy Enstitusu : キョイ・エンシテイテュス)」という学校を開設した。

ムスタファ・ネジャーティが、教育大臣になるまでは、教師たちが、尊敬されず、人権侵害といった理不尽な目にあうことが少なくなかった。特に教育委員長、指導主事、知事、政治家といった人たちによって教師は都合の良いように使われており、国家権力の僕のような扱いを受けていた。ギュヴェン (Güven) は「彼の任期中はそういう理不尽な扱いは改善され、ほとんど起こることがなかった。彼は、自ら教師たちと接することを重要視し、教師たちに手紙を送ったりしていた³²⁾」と述べた。教師たちは自分たちが直面する理不尽なことや問題をムスタファ・ネジャーティに伝えることができたなら、それは必ず解決されると思っていたが、これはムスタファ・ネジャーティ自身が教師としての体験を持っており、教職とその改善に対する強い情熱があったからである。こうして、ムスタファ・ネジャーティはこれまでにない教師に信

頼される教育大臣になったのである。彼はまた近代的な教育省の成立期に教育大臣の職責を担いながら、教員組合会長という今日では考えられない二つの役割を同時に担当しており、両方の立場から教職の発展に取り組んだ。即ちこれは、教師を都合のよいように利用する政治家から自らを守る姿勢を見せることと、教育政策への教師の参加を促す働きかけを行うためであった。ただし、現実的にはいまだトルコの教育政策を決定するうえで教師の参加が実現されていない。

彼は教職員を養成するための多くの研修コースや校内研修を設置した。他方で、省内にある資源と環境を改善しながら改革の実施に積極的に取り組んでいた。例えば、男女職業高等学校、中学校、高等学校などの教育改善のためのヨーロッパへの教職員と学生の派遣、中学校に様々な分野の専門性を持つ教員を配置できるような教員養成研究パイロット校である「ガジ師範学校 (Gazi Ogretmen Okulu: ガジ・オーレトメン・オクル)」の設置³³⁾などである。このように彼は、トルコの公教育の成立に必要な教員を養成することを最重要課題とした。

以上のように、ムスタファ・ネジャーティは、教育政策の成立において様々な取り組みを行った。彼が教育大臣を務めていた時期、民主国民党が徐々に国の政権を取り、民主国民党の下で長いスパンで変わらない着実な教育政策を実施する結果となった。ムスタファ・ネジャーティは、歴代大臣の時期に行われていたことをも配慮しながら、教育政策に新たな方向性を主導したのである。

3. 3. 文字改革 (Harf inkilabi: ハリフィ・インキラブ) とトルコ語の研究

ムスタファ・ネジャーティのさらなる改革は、アラビア語とペルシャ語とトルコ語から成るオスマントルコ語を廃止し、新しくラテンアルファベットの文字を基本とする文字改革を行ったことである。オスマントルコ語は、一般国民には学ぶことが難しく、一般的には皇帝と宮殿周辺の関係者の間で話されているエリート語であると認識されていた。彼が教育大臣であったとき、トルコ語研究委員会を設置し、そこでもともとトルコ語であった単語を抽出し、ペルシャ語やアラビア語の単語を(オスマン)トルコ語から消していった。そこには、誰もが簡単にトルコ語を使って学ぶことができるようにするためという意図があった。この委員会はトルコ語の問題を検討し、トルコ語について科学的研究を行い、文法を作り、トルコ語単語を整理し、国語辞典を出版する予定だった。しかし、この委員会はいくつかの原因で十分に機能しなかったため、当初の予定通りにはいかなかった。

共和国国家の宣言とともに、トルコ国民の中で読み書き計算ができない一般大衆を共和国の理念に基づき、どのように教育すれば良いのかの議論が行われ始めた。ムスタファ・ネジャーティは、初等教育を全国民に提供するために国民学校 (Millet Mektepleri: ミッレティ・メキテプレリ) を設置した³⁴⁾。そこでは、トルコの国家教育が目指している新たな教育の発展の方

向は西欧の教育政策の路線であること、また教育において継続性が重要であることを示し、教師教育や社会的地位の向上などを重要な課題として取り上げた。その時期以降、実施されていた取り組みの一つは、国民学校または国民教室（Millet Dershaneleri：ミッレティ・デリシハネレリ³⁵⁾）という一般庶民の教育のための場の設置である。ムスタファ・ネジャーティが作った新しい国家教育省に国民教育課という機関が設定されたことは、重要な進歩ととらえることができる。この機関が設置された背景にはデューイの報告書の影響があった³⁶⁾とされているが、筆者は、デューイよりアタテュルクの前掲の国家建設方針に示した教育方針やその意向がより重要な要因だと考える。

こうして国民教室の全国での設置が1927年に完成された後、進学率が急激に増大した。そしてこの教室では、多くのトルコ国民に対する識字教育が行われていた。文字革命が行われた後、この教室を国民学校という形で組織化したが、その役割は主に全国民に新しい文字を教えることと定められた。文字革命によって、エリートしか使わないオスマントルコ語では簡単にできない読み書きが、やりやすくなり、国民の識字教育が全国で行われるようになり、識字率が向上していったといえよう。

4. おわりに

トルコの近代公教育制度の成立において多くの重要人物が様々な取り組みをしてきたが、中でももっとも重要であったのが、本人も教育実践者であり、教職の重要性をいち早く理解し、その向上と教師の力量向上・発展に専念していたムスタファ・ネジャーティである。彼が任期中に行った多くの改革は、彼の任期終了後も引き継がれ、これを基礎に新たな教職の発展・向上に関する政策が打ち出されていった。ムスタファ・ネジャーティは大臣としての任務期間において、トルコの近代公教育の発展のために、新しい様々な挑戦的教育改革を迅速に進め、国家教育省、教育委員会、そして学校組織の間でのバランスのとれた連携・協働的な関係性を築き、教師と教職に対する社会的地位の向上、教師への敬意の増大、教職の専門性の向上及び教師への信頼などの教師の地位の向上・強化に貴重な貢献をしていた。

彼は、国が重大な貧困状況に置かれている時期にも教育の発展のために重要な投資をさせ、トルコの近代的公教育が世俗主義という理念の下で発展するよう多大な努力をした。教師の力量向上、指導主事の資質能力向上などのために様々な研修を開催したり、外国から専門家を招いたり、教材の開発と各学校へ配布をしたりするような取組を実施した。教師の専門性向上を目指して、指導方法のための雑誌の出版、当時は国民に反対されて、行われてこなかった男女共学の実現、文字改革などのような新たな取り組み等は彼の教育大臣としての任務期間において実現された画期的なことである。

以上に加え、中学校のための教員と小学校のための指導主事の養成、新たな教育研究等に取り組んだ。また、世界中のあらゆるところで行われていた新たな教育先端的取り組みや教育改革や新たな実践や教育方法についての研究結果を全国に配信するために中学校教師養成のための師範学校と教育学会を設置させ、教員養成のための師範学校の入学者数基準を大幅に増やした。また教師たちから成る教員組合組織を自ら設置し、また自らそれらの組織の会長となり、全国規模での教師の組織化を図った。教師の心身の健康とともに働く環境改善を行い、法律上の教師の権利について重要な改定を行った。

ムスタファ・ネジャーティは教育の科学的発展を重要視し、教育政策を作成するうえでも国内のみならず国外の専門家も活用した。彼の改革の特徴は、決定された教育政策などを躊躇なく即座に実施したことである。当時近代化を目指していたトルコにとって近代的公教育の発展は最大の課題であったことであり、それを成し遂げるうえで、ムスタファ・ネジャーティの果たした役割はいくら強調しても強調しすぎることではない。彼の功績によってトルコの近代公教育は大きな発展を成し遂げることができ、全体的に国民の教育レベルが向上していったといえよう。しかし、今日のトルコの教育政策をみると、近代化する以前のような教育内容が教示され、教育の近代化の方向に逆行していると考えられ、今一度改革の原点に立ち戻り再考する必要があると考える。

注

- 1) Guven (2001)
- 2) Özer (2009)
- 3) 同上
- 4) TBMM (2009)
- 5) İnan (1980)、p.41
- 6) Peker (2013)、p.19
- 7) Guven (2001)
- 8) 同上
- 9) 同上
- 10) デューイは、1924年にトルコを訪れ、特に、農業、識字、読書習慣、図書館制度、初等教育プログラム、教育財政について報告書を提出した。共和国宣言後に民主的な国民形成をするための公教育制度を成立させ、民主的な国民形成を実現するための教員養成をいかにするかについて提言をしてもらうために当時の教育大臣によって招待された。
- 11) Dewey (1939)、p.13
- 12) Peker (2013)、p.19

- 13) 教育省 (Maarif Teskilati : マアリフ・テシキラティ) と教育委員会 (Maarif Eminlikleri : マアリフ・エミリキレリ)
- 14) 統合 (Eğitimde Birlik : エイティムデ・ビリリク)
- 15) İnan (1980)、pp.12-13
- 16) Ergun (1997)、p.39
- 17) 同上
- 18) 同上
- 19) Dewey (1939)、p.13
- 20) Ergun (1997)、pp.38-39
- 21) 同上
- 22) İnan (1980)、p.367
- 23) 教員向けの美術教育のために、ドイツから音楽家 (大学の教授も)、デンマークから手芸の専門家、画家、スウェーデンから体育の専門家などを招待して、教員養成プログラムを作成してもらった。
- 24) İnan (1980)、p.361
- 25) ムスタファ・ネジャーティは、1927年にトルコの公教育の再建の参考にするために、ヨーロッパに近代的公教育の視察をしに行く。そこで視察した国々は、ベルギー、ドイツ、イギリス、フランスであり、特に教員養成、中学校教育カリキュラムや指導方法などについて調査を行った。その国々の公教育制度の中からトルコの公教育制度へ導入する新たな教育制度の導入を図っていた。
- 26) İnan (1980)、pp.117-118
- 27) Ergun (1997)、pp.137-138
- 28) Guven (2001)
- 29) 同上
- 30) Akyüz (1999)、p.356
- 31) İnan (1980)、pp.358-359
- 32) Akyüz (1999)、p.357
- 33) İnan (1980)、p.359
- 34) 国民学校は1928年の文字改革後、国民80%が読み書きできない状況にあり、国民の識字率を高めるため、読み書き教育運動が始まって、それを実現するために作られた学校である。男女問わず16歳から45歳の国民に義務化されており、年齢の違いによって国民学校の教育内容も変わっていた。一般的に読み書き以外に、健康や生活に関するものなどが教えられていた。1927年全国の識字率は10.5%であったが、1935年に20.4%へと増大していた。Albayrak (1994)、p.482
- 35) Ergun (1997)、p.101
- 36) Guven (2001)

参考文献

- Guven Ismail, 「Mustafa Necati'nin Türk Eğitiminin Gelişimine Katkıları (ムスタファ・ネジャーティのトルコの教育の発展への貢献)」『Milli Eğitim Dergisi (国家教育省雑誌)』、第149号、(2001)、http://dhgm.meb.gov.tr/yayimlar/dergiler/Milli_Egitim_Dergisi/149/guven.htm (最終観覧: 20160429)
- Özer Fuat, 「Mustafa Necati Bey (ムスタファ・ネジャーティ氏)」、Dokuz Eylül Üniversitesi (ドクズ・エイルル大学)、(2009)、<http://webb.deu.edu.tr/ketam/index.php/hakkimizda/mustafa-necati> (最終観覧: 20160430)
- TBMM (トルコ国家教育省)、 「Mustafa Necati Kultur Evi (ムスタファ・ネジャーティ文化館)」、(2009)、https://www.tbmm.gov.tr/kultur_evi/ (最終観覧: 20160429)
- İnan M.Rauf, 『Mustafa Necati』、Türkiye İis Bankasi Kultur Yayinlari: (トルコイシユ銀行出版)、(1980)
- Peker Mümtaz, 「Devrimci Bir Aydın: Mustafa Necati (革命家で啓蒙者であるムスタファ・ネジャーティ)」、 『Calisma Ortami Dergisi (勤務環境雑誌)』、第127号、(2013)、pp.18-22
- Dewey John, 「Türkiye Maarifi Hakkında Rapor (トルコ教育省についての報告書)」、 『MEB (国家教育省)』、İstanbul、(1939)、<https://www.tbmm.gov.tr/eyayin/> (最終観覧: 20160429)
- Ergun Mustafa, 『Ataturk Devri Turk Egitimi (アタテュルク任期期間のトルコの教育状況)』、Ocak、(1997)
- Akyüz Yahya, 『Turk Egitim Tarihi (トルコの教育史)』、Ani Yayıncılık、(1999)
- Albayrak Mustafa, 「Millet Mekteplerinin Yapisi ve Calismalari (1928-1935) (国民学校の構造と実践 — 1928年～1935年)」、 『Atatürk Araştırma Merkezi Dergisi (アタテュルク研究センター雑誌)』、第29号、(1994)、pp.471-483

(Cakir Murat 短期大学部助教)